
斬奸の志

元素猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斬奸の志

【Nコード】

N3359Z

【作者名】

元素猫

【あらすじ】

飛行機が飛ぶほどの科学力がありながら、日常に侍が存在する世界での物語。

最強と言われた侍の父親を殺した息子の慶は、広域警察組織の斬奸隊の隊長に任命される。問題ばかりの隊員たちが集まる第十三隊宿曜の隊長として、数々の事件に挑む。三賢者の思惑、Sランクの侍が当主である七公家の暗躍の中、慶は自らが信じる斬奸の志を胸に戦うのだった。

プロローグ（前書き）

自分もつとも影響を受けた作品が、池波正太郎さんの「鬼平犯科帳」や「剣客商売」です。

いつか、こんな作品を書きたいという思いがありました。時代劇を書くには敷居が高すぎるので、自分の書きやすい現代風のファンタジーっぽくしました。

プロローグ

凶悪で重大な犯罪の容疑者だけが連行される、中央拘置所に一人の少年が収容された。彼の年齢が十六歳という事を考えたら異例の事だったが、法律では一応、成人と見なされる年齢ではあった。

容疑は殺人罪、被害者は少年の父親である。

「初めまして、美波羅慶くん」

牢から会議室のような部屋に連れてこられた少年　美波羅慶に、

年配の男性が面会にやって来た。手錠を付けられたままパイプ椅子に腰掛け、事務机を挟んで男性と対面する。

「私は草弦そうげんという。名前くらいは、耳にした事はないかな？」

慶は男性の顔をしばらく見て、視線を逸らしながら頷いた。

白髪で好々爺の雰囲気を滲ませる男性からは、世間の噂で聞く草弦という名の印象とはほど遠い気がした。

司法のトップ、三賢者の一人、そして斬奸隊ざんかんの長官でもある人物だ。冷酷、鬼という形容詞が付いて名前を呼ばれることが度々ある。

「意外、という顔だね。私も同じように、少しだが驚いているよ。」

もっと、ギラついた目か、悲壮感でも滲み出ているかと思っただけだ、案外、しっかりと自分を見据えている」

慶は黒髪を短く切り揃え、どこにでもいる普通の男の子に見えた。顔立ちも幼さを残しつつも、男らしい目付きをしている。大概の人が慶を見ても、真面目な優等生を絵に描いたような印象を受けるだけだろう。とても、殺人を犯すようには思えないはずだ。

「普通、というと語弊があるが、今まで見てきた経験では、身内……自分と近い人物を殺害した容疑者というものは、心神喪失の状態あるいはそれに近い様子が多い。自覚がない場合でも、どこか上の空だったり、言動が不明瞭だったりする。だが君は、しっかりと揺るがぬ意志を、その瞳に宿している。そういう人物もいないわけではないがね、十六歳という年齢で達観するには、若すぎる気

がするよ」

「……」

「何が君をそこまで追い詰めたのか、聞かせて欲しいな？」

草弦の問いかけに、慶は机に落とした視線を上げて口を開いた。

「母は、父に殺されました。幼い僕は、それを止めることも出来ずに、ただ、テーブルの下に隠れて身を震わせるだけでした。そんな僕に、父が一振りの刀を残して行ったのです」

「君が逮捕時に持っていた、りょうぶほうてんさん 両部宝天斬・胎蔵 たいぞう だね？」

慶は黙って頷き、それを肯定する。

「父が持つ 両部宝天斬・金剛 と対を成す、妖刀です。なぜそれを置いていったのか、僕は考えました」

「君はそれを、自分に対するメッセージと考えたわけだ？」

「はい」

慶の父親は、しどういん 司堂巖 という。美波羅というのは、母親の旧姓だった。

司堂は最強の 侍 しゆうざい と言われ、四十八人を殺害した容疑で指名手配をされていたのである。その父親を、十六歳の慶が殺したのだ。

「あるいは、そう考えることで精神のバランスを取っていたのかも知れません。感情のやり場があったことが、救いでもありましたから……」

「なるほど。それは一理あるかも知れん」

「ですが、最後の時……父が息を引き取る間際に言った言葉が、父の本意だったような気がします」

「何と言ったのかね？」

「四十八人の中で自分の意志で殺したのは、母ただ一人だと……」
自然と、慶の目から涙が溢れた。

「その言葉を聞いた瞬間、父は自分に殺されることを待ち望んでいたのだと、悟ったのです。それが、父の愛情だったのだと」

いや、愛情とは違うかも知れない。慶は自分で喋りながら心の中で反対のことを思う。その意志を、きつと完璧に理解することなど

出来はしないのだろう。

「殺人を正当化する理由など、ありはしないさ。ましてや、愛情などではないよ」

草弦が言った。慶はそれに頷き、目を伏せる。想像することに、意味などない。あるのは父が母を殺した事と、自分が父を殺したという二つの事実だけだ。それだけが、家族を結ぶ真実だった。

残ったのは、二振りの妖刀のみ。

「罪は問われるべきだし、裁かれるべきだ」

「はい」

「だが本音を言えばね、こちらとしては大いに助かったわけなんだよ。司堂巖を捕えることが、出来なかつたからね。結果としては、変わらない。斬奸隊によつて殺されたか、君に殺されたかの違いなだけだ。差異は受け手の感情の中にしかない。事実は同じ」

そう言つて、草弦は笑みを浮かべる。

「斬奸隊の長官としては、いささか情けないことではあるがね。知つての通り、凶悪な犯罪や複数の管轄を跨ぐような広域犯罪を扱う目的で、斬奸隊は結成された。そんな中で、逮捕は難しい場合において、斬り捨て御免を認められた稀な組織でもある。だからこそ斬奸隊の隊員はみな、一定レベル以上の実力を持つ侍によつて構成され、厳しいテストをくぐり抜ける必要があるのだ」

「……」

「これはあくまでもこちらの提案で、強制ではない。事実は事実として、何も変わらないし嘘を吐く必要もない。ただ、司堂巖を殺害したのが、斬奸隊の隊員であつたという報告書の間違いを指摘するだけだ」

草弦は感情の见えない顔で、ジツと慶を見た。その視線を正面から受け止めつつ、慶は思索する。

「勧誘ですか？」

「その資格があるだろう。資質は今、見定めているところだ」

慶は視線を、手錠がはめられた自分の手に移す。手を開いて閉じ、

まるで汚れを確認するように裏表に何度も返した。草弦はその様子を、黙って見守る。

「……父が母を殺したのは、僕がまだ五歳の頃です。十一年、ひたすら剣の修行を続けました。父を殺すことを考え続けていたわけではありません。むしろ、考えたくないから剣の修行に没頭したのだと思います。剣を振っている間は、余計なことを考えずに済みました」

草弦は相づちを打つように、小さく頷く。慶は話を続けた。

「父の居場所がわかった時、初めて迷ったんです。ずっと鍛錬は続けていて、勝てるかも知れないというわずかな希望もあって、足りないのは覚悟だけでした」

「人を殺す覚悟かな？」

「父親を殺す覚悟です」

目を伏せた慶は、口元に笑みを浮かべる。

「迷いながら父の元に向かい、迷いながら父と対峙しました。そして刀が父の命を奪う瞬間、僕はようやく覚悟をしたのです。この愚かな行為を、背負って生きようと」

「自殺は考えなかったと？」

「自殺をするなら、父を殺す必要などありません。同じ世界に存在するということが許せないから、復讐を果たしたのだと思っています。だから、自分は生きようと思いました。罪は償います。誰に對してかは、わかりませんが」

「まあ、そうだね。加害者が被害者の遺族にもなるわけだからな。償いという言葉は、意味のないものだ。強いて言えば、法を遵守する人々の精神的な意味だろうね。『償いました』という免罪符が欲しいのだろう」

「僕はもう、人を斬りたくはありません。その覚悟もない。ですから……」

「嫌なら斬る必要はない。斬奸とは悪を斬ることだが、それはやむを得ない場合の処置でしかない。その判断は、各隊の隊長に一任し

ている。引き受けてくれるなら、君には隊長を任せようと思っ
てるんだよ」

草弦は事務机の上に、バッジを置いた。直径が十センチほどの、
斬奸隊のバッジである。バッジには、七本の剣が七角形を描き、そ
の中に三つの星が描かれていた。

七本の剣は、この国のトップである七公家を表し、三つの星は三
賢者を表している。

「戦乱の時代が終わったのは、まだわずか五十年前だ。天下を取
ると無数の侍が名乗りを上げたが、結局、領地を広げて残ったのは
七つの勢力……つまり、現在の七公家のみ」

この七つの勢力は、力が拮抗していた。このまま戦いを続けても
疲弊するばかりで、外敵に隙を見せることになる。そう考えた各勢
力を率いる侍たちは、国としての基本的な法を創り、後の行政は個
々に委ねることにしたのだ。この際に、七つの勢力の代表は、公爵
となり、従った侍たちは当時の身分に従って爵位を与えられたので
ある。

連邦国家として、この国は生まれ変わったのだった。

「三賢者などと言えば聞こえはいいが、ようするに個々にある七つ
の勢力を繋げる、緩衝材のようなものだ。建前としては、国民の
代表というものもある。我々には爵位はなく、貴族ではないからな
私が斬奸隊を創設したのも、警察組織が分断されていたからだ。犯
罪は凶悪化、広域化する。戦乱が終わった後、多くの侍が行き場を
失ってしまったからね」

「父は子供の頃、両親を目の前で侍に殺されたと話していました」

「無法者が多かった。だからこそ、斬奸が認められたんだよ。君に
は、第十三隊『宿曜』^{すくよう}の隊長をお願いしたい。隊長にはAランク以
上の実力が必須だが、司堂巖を倒せるほどの腕ならば異論は出ない
だろう」

「宿曜……」

「いずれ知れることだから、最初に言っておくよ。宿曜はまあ、厄

介払いされた連中が集まったような部隊だ。色々な事情で、他の部隊から在籍を断られたり、追い出されたりね。むろん、実力に問題はないよ。斬奸隊の入隊試験はクリア……つまりCランク以上の能力はある」

侍のランクは、最低がFランクで、最高がSランクである。Sランクはこの国で七人……つまり七公家の当主のみだった。

「どうするかい？」

慶はジツと斬奸隊のバッジを見つめていた。生きようとは思うが、目標があるわけではない。刑務所に入ること覚悟していたし、簡単に出来るとも思わなかった。

「僕は……」

このまま何もしなければ、結局、父に振り回された人生のような気がした。思い通りになるだけの一生。そんなのは、嫌だった。

今更、同じ年頃の子のような毎日を望むわけではない。ただ、ひたすら続けた鍛錬が父親を殺して終わりというのでは、あまりにも悲しすぎる。

少しはマシだろうか。

(同じだ)

父を斬った時と同じ。結局、何か取り返しの付かない瞬間まで、覚悟などできやしないのだ。

慶は手を伸ばす。事務機のバッジを掴み、笑みを浮かべる草弦を真っ直ぐ見た。

「よろしく」

草弦の言葉に、慶は小さく頷く。

こうして斬奸隊第十三隊『宿曜』の、新しい隊長が誕生した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3359z/>

斬奸の志

2011年12月11日16時51分発行